

「アメリア 永遠の翼」 ★★★

2010（平成22）年11月27日鑑賞く
TOHOシネマズ梅田>

監督：ミラー・ナーイル

アメリア・イアハート（女性飛行士）／ヒラリー・スワンク

ジョージ・パットナム（アメリアの夫）／リチャード・ギア

ジーン・ヴィダル（パイロット、アメリアの友人）／ユアン・マクレガー

フレッド・ヌーナン（フライト・ナビゲーター）／クリストファー・エクルストン

エリノア・スミス（女性飛行士）／ミア・ワシコウスカ

2009年・アメリカ映画・111分

配給／ショウゲート

<アメリアとは？あなたはその名前を知ってる？>

私はリンドバーグはよく知っているが、女性として世界ではじめて大西洋を横断したアメリア・イアハート（ヒラリー・スワンク）は知らなかった。しかし彼女は、アメリカでは「史上最も有名なアメリカ人10人」に選ばれるほどの有名人らしい。本作における注目の第1は、そんな彼女を支え、夫にもなったジョージ・パットナム（リチャード・ギア）との夫婦愛だが、後に民間航空業界の草分けとなってアメリアを支えた男性ジーン・ヴィダル（ユアン・マクレガー）の存在によって、そこにはいつも波風が・・・？

「私には結婚は向いていない」。そう言いつつジョージからの再三のアプローチの前にアメリアは結婚を決意したが、その際に交わされるさまざまな誓約（？）と、結婚式の時に神父から紋切り型に出てくる質問に対して返すアメリアの「変地球」が面白い。それは、私が講演の際によくしゃべってることと同じで、「汝、生涯この男を愛することを誓うか」との質問に対して、「誓います」と言わず、「そのつもりです」と答えるところ。なるほど、アメリアは自分の夢に忠実であるとともに、自分の気持にも忠実な女性であると痛感！

<飛行シーンだけで2時間は？>

映画はアメリアが世界一周飛行に臨むところから始まり、「ある結末」を迎えるところで終わるが、基本的に飛行機を飛ばすだけのストーリーで1本の映画をつくるのは無理がある？私が中学生の時に観た『素晴らしきヒコーキ野郎』（65年）はめちゃ面白かったが、これはもともと企画段階から映画化に絶好な要素がいっぱい詰まっていたためだ。そう考えると、『翼よ！あれが巴里の灯だ』（57年）や本作は、もともと映画化には不向きな素材？

当初は金の亡者のように思っていたジョージが、次第に物心両面ですべてを投げうってアメリアを支える存在になっていく感動的なストーリーはあるものの、肝心の飛行機を飛ばすシーンの盛り上がりがこの程度では観客は退屈するのでは？

<女性としての魅力は封印？>

第77回アカデミー賞作品賞を受賞したクリント・イーストウッド監督の『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）（『シネマルーム8』212頁参照）の主演女優がヒラリー・スワンク。彼女はこの作品で2度目のアカデミー主演女優賞に輝いたが、そこで彼女は女性としての魅力をかなり封印していた。彼女が女性としての魅力を最も発揮したのは、『マリー・アントワネットの首飾り』（01年）。そこで彼女は主人公ジャンヌ役を力強く演じていたうえ、女性としての魅力もいっぱいだった（『シネマルーム1』68頁参照）。しかし、本作ではできるだけホンモノのアメリアの姿に近づけようとしたためか、ヒラリー・スワンクは本作でも女性としての魅力を封印？

もちろん、飛行機に乗る時には長い髪はじゃまだから、ボーイッシュな髪型が不可欠。また、スカートではなくズボン着用が不可欠というのはわかるが、それ以外のシーンではもっと女性的な魅力をみせつけてくれても良かったのでは？

<「時代」にも注目！>

アメリアのことを全然知らなかった私だが、私は、彼女が女性飛行士として世界的に有名になり、エリノア・スミス（ミア・ワシコウスカ）らの女性飛行士集団を組織した1930年代という「時代」に注目。彼女がリンドバーグと同じように単独で大西洋横断飛行を成功させたのは1932年5月だが、その直前の1931年9月18日には日本は柳条湖事件を発生させていた。次は、1935年のハワイのホノルルからアメリカ本土のオークランドまでの単独飛行。そして、世界一周へのチャレンジが1937年5月のことだ。他方、ナチス・ドイツのポーランド侵攻はその2年後の1939年9月1日。日本軍によるハワイの真珠湾攻撃はさらにその2年後の1941年12月8日のことだ。この真珠湾攻撃の4年前にアメリアはホノルルから世界一周飛行に飛び立ち、そのことをアメリカ国民はこぞって応援していたわけだ。

このように1930年代急速に航空機の技術を高め、ジョージの尽力によって民間人のチャトル飛行まで実現させていたアメリカという超大国に日本が戦争を挑んだとは！私はそんな視点からも本作に注目！